

はじめに

四条遺跡は、弥生時代・古墳時代・飛鳥時代の複合遺跡です。古墳時代については、昨年度調査した、四条1号墳をはじめとして中期古墳が多く確認されており、注目されてきました。本年度は、古墳群を削平して造営された藤原京を中心に調査しました。

今回の調査範囲と面積は、1987年に実施した四条遺跡第1次調査区と重複する約2,000㎡と、新規掘削部分約4,300㎡で、合わせて約6,300㎡です。

調査の成果

① 飛鳥時代（藤原京）の遺構

今回の調査では、四条大路側溝、掘立柱建物・塀・井戸・溝などを検出しました。

第1次調査・第36次調査と同様に第37次調査でも、藤原京の条坊道路である四条大路を検出しました。四条大路は、南側溝および北側溝を検出し、溝の芯々間の距離は、15.7mです。

また、道路側溝以外に計6条の溝を検出しました。いずれも東西・南北の正方位の溝です。溝3は、四条大路の路面中央に位置する東西方向の溝です。幅約1.7m、深さ0.5mで、四条大路の側溝と同規模です。溝9は、四条大路南側溝の南側2.7mに位置する溝です。幅約3.8m、深さ0.9mで、四条大路側溝の倍以上の規模です。溝の下層には、粗砂が堆積することから、流水環境であったと考えられます。溝14は、幅2.4m、深さ0.6mの南北方向の溝です。南側は、幅1.0m、深さ0.2mと急激に狭く浅くなります。この溝は、五条六坊東北坪を東西に二分する位置にあり、坪内を区画するものです。溝15は、深さ0.2mの浅い南北方向の溝で、南側が幅6.2mの方形の池状に幅が広がります。底面は平坦で、埋土の状況からも流水環境であったとは考えにくいです。溝14・15からは、漆が付着した土器類が多数出土しました。

掘立柱建物は、新たに17棟を検出しました。第1次調査・第36次調査と合わせて計35棟になります。建物群や塀は、柱列の方位や切り合い関係から大きく2時期に分けることができます。

調査地は、藤原京右京四条六坊および五条六坊にあたり、四条大路を挟んで南北2つの坪に分かれます。四条大路の北側(四条六坊)では、比較的柱穴の大きい掘立柱建物が並び、遺構密度も高いです。さらに建物は、塀2や溝10・11によって区画されます。四条大路の南側(五条六坊)では、坪内を溝14により東西に区画されます。東側では、掘立柱建物が並び、北側と同様です。一方、西側は、2間×5間の比較的柱穴の小さい掘立柱建物(建物30～33)が東西に整然と並び、遺構密度は比較的low、異なる様相です。溝14・15からは、漆が付着した壺類が多数出土し、漆を用いた何らかの作業をここで行っていた可能性があります。

② 古墳時代の遺構

今回の調査では、古墳時代の溝や土坑を検出しました。古墳時代の遺構は、特に調査区の南東側に集中して見られます。

溝18は、南西から北東へ延びる、幅1.2m～4.5m、深さ0.7mの不整形な溝で、長さ約40m分を検出しました。溝内からは、完形に近い土器の他、木製品や埴輪が出土しました。遺構の時期は、5世紀前半で、四条1号墳が造られる前段階のものです。

土坑1からは、木製品や馬歯が出土しました。木製品には、横槌や鋏、植物の蔓などがあります。植物の蔓は、丸く巻かれまとめられた状態で出土しました。

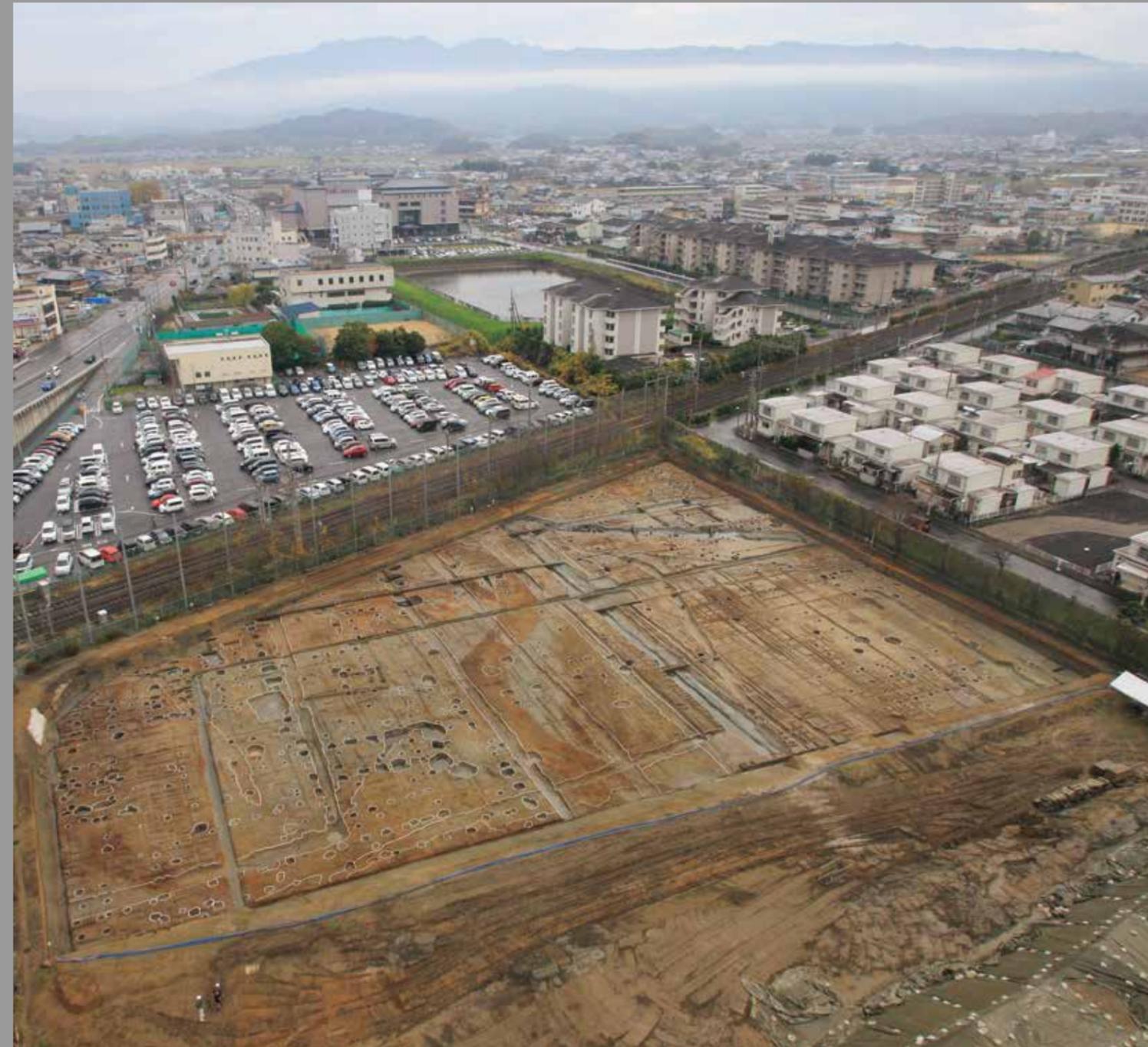
まとめ

今回の調査では、6,300㎡と広い面積を調査することにより、藤原京右京四条六坊と五条六坊の坪内の状況を確認しました。四条六坊は、掘立柱建物を中心とした宅地と考えられます。五条六坊は、坪内をさらに溝によって東西に区画します。西側では、2間×5間の掘立柱建物4棟が東西に並び、近接する溝から内面に漆が付着した土器類が出土したため、漆を用いた何らかの作業が行われていた可能性が考えられます。

古墳時代の遺構は、5世紀前半の遺構が中心であり、四条1号墳が造られる以前の土地利用の様子が窺えます。

四条遺跡 第37次 藤原京右京四条六坊・五条六坊調査

現地説明会資料



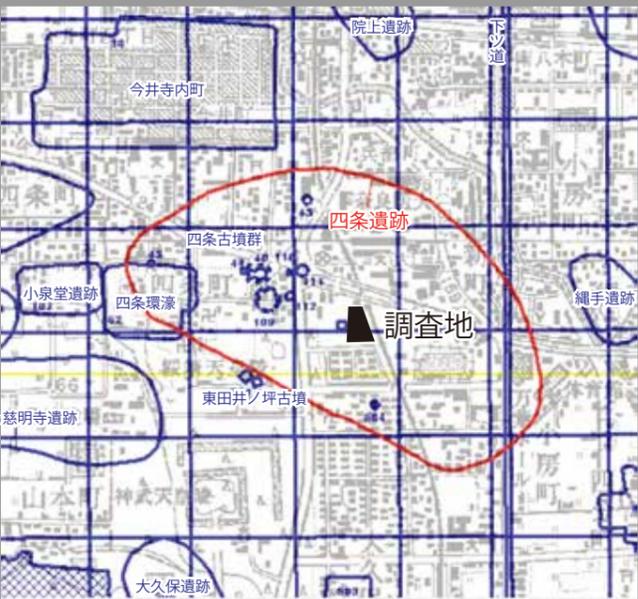


図1 調査地位置と周辺の遺跡

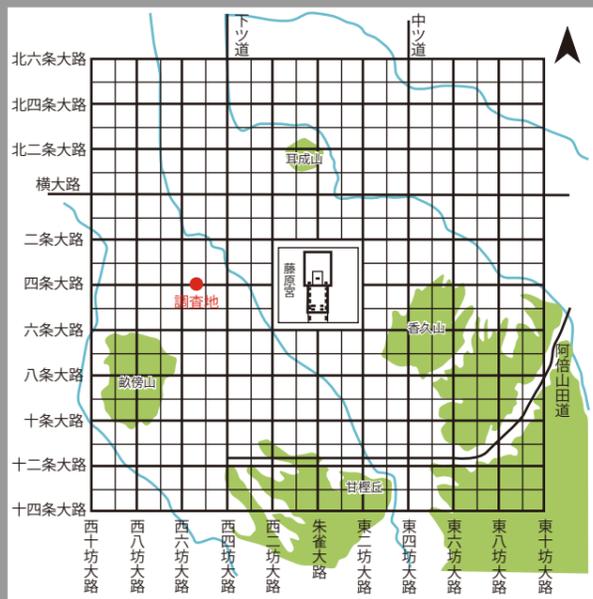


図2 調査地位置と藤原京

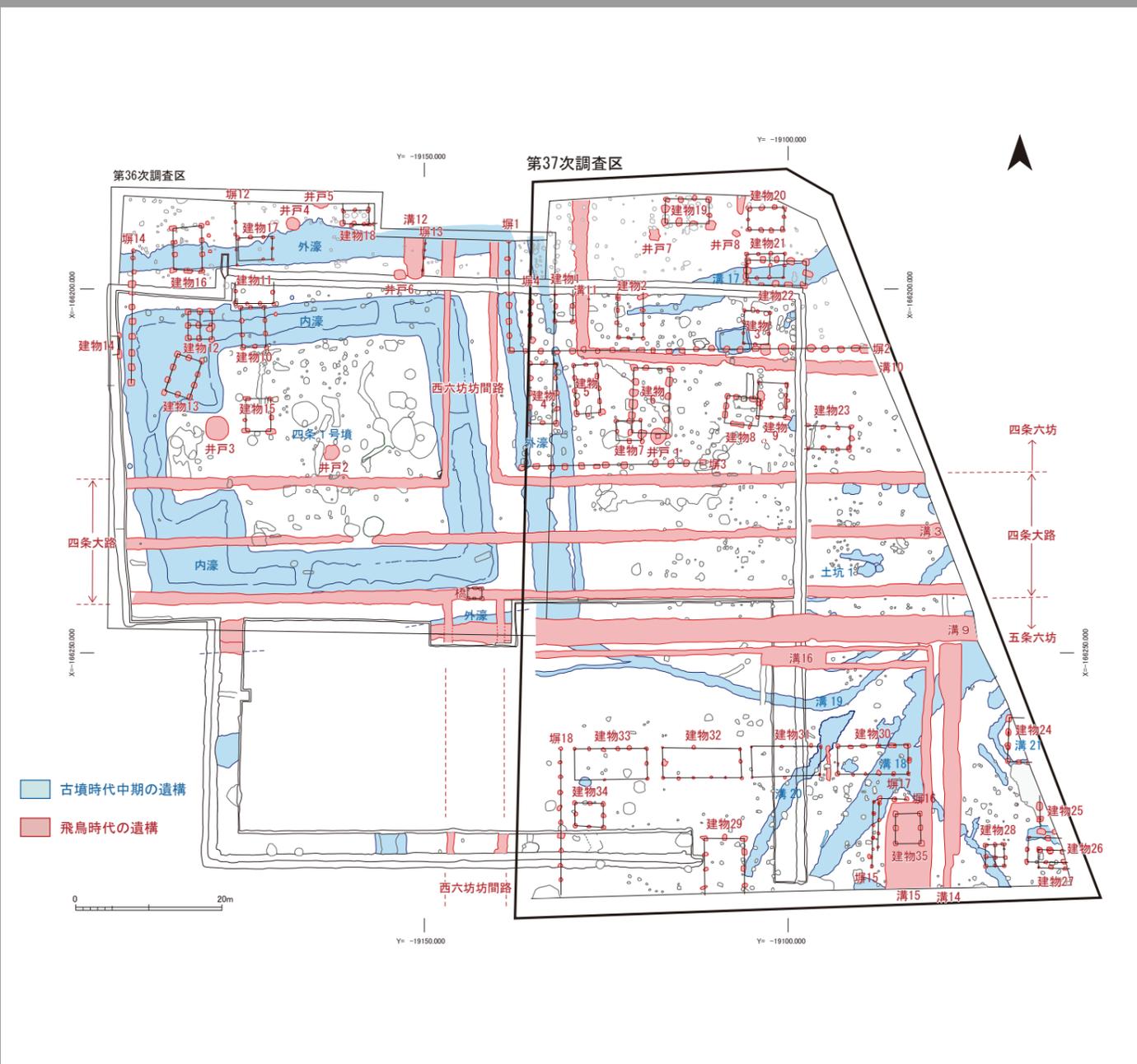


図3 第1次調査・第36次調査・第37次調査 遺構全体図
※黒太線枠内が今回(第37次調査)の調査範囲



写真1 溝18 (北東から)



写真2 土坑1 木製品・馬歯出土状況 (東から)



写真3 溝19 土器出土状況 (南から)



写真4 建物21・22 (東から)



写真6 溝9 (西から)



写真5 建物33・32 (西から)